

Title	J・R・ラベッツ著 中山茂訳 『批判的科学：産業化科学の批判のために』
Sub Title	Jerome R. Ravetz, Scientific knowledge and its social problems
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1978
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.51, No.8 (1978. 8) ,p.105- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19780815-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

J・R・ラベッツ著

中山 茂訳

『批判的科學——産業化科學の批判の ために』

「科學V」という呼称は、政治學にとつては何やら悪魔的な魅力をもつてゐる。そこには「科學にさえないは……」といった、突きつめた想いすらうかがわれる。そのことは、戦後政治學が、デモクラシーを大価値に奉じあげて、人間の営為はあげてこの大価値を実現することにあり、その営為のレヴェルは個人・集団・組織・制度・國家といった、あらゆるところに発現する、としたことに見ることが出来る。いわば、そこにはデモクラシーが唯一に、そして確定的に、しかしながら個々の人間の魂や身体をまぐること包摂し切つた形で定礎され、それへの内在批判的な営為は、あたかも非生産的な思惟だとも呼ば捨てられる、画一的行動主義への贅嘆があつた。

言いかえれば、科學は科學として、自律的にデモクラシーへの嚮導路を切りひらき、人間はそのルートに着底することで、まずは國家民主主義が實現され、こうした國家の集合体は、おのずから、デモク

ラーの世界をこの世に達成することを予定してゐた。政治學は政治科學として、この達成動機を明確に内包し、その達成路に立ちふさがるであろう個人的・集團的等々の障礙を排除する技法と、そうした障礙を形成しうる心理的・社会的要因の剔抉に邁進することになつた。

しかし、政治學における科學のこの自動制御作用が、歴史を切りひらく人間の創造的営為を先導することは、もちろんできない。むしろそこでの「歴史の創造V」としての科學的営為は、ただ人間の行動として現われたものを、後追ひし跡づけるだけのことであつた。そこには、問題の自己発見的領域は放置され、たとえば投票行動に典型的に見られるような、制度的に周期的に現われる人間行動を待つて分析するといふ（ラベッツのいう）「フル・プルーフ」科學が無残に取り残されてゐる。

何が「善い生活V」であり、何が「善い社会V」であるかは、時代つまり歴史によつて規定されるにちがいないが、デモクラシーのための科學が、典型的に公書に結んだとき、それは確実に反人間の科學として、われわれの眼に明らかになつたのと同じ文脈で、素朴な科學主義に浮かれた政治學にあつて、その科學が「ヒリズム」にも通じていることをわれわれは知らねばなるまい。

人間の後追ひは、この素朴さからいかに離脱し、人間にたいする自己発見がいかに連接するかの意義と角度を発見した場合にのみ、人間の歴史的創造に参加しうる。少なくとも当分は、反科學的視点から政治科學への批判を続けることこそが、人間における「詩」と真

実Vに足を立てねばならぬ政治学の生命ではないのか。パリー・コモナーの『科学と人類の生存』(講談社刊)、B・ディクソン『何のための科学か』(紀伊国屋書店刊)、柴谷篤弘『反科学論』(みすず書房刊)、などで示された行論を吟味しつつ、本書が政治学に有意なもう一つの科学論であることを確かめることが、ニヒリズム科学に政治学を化すことのない科学者を、政治学者のなかに育てあげるよすがになると信ずるものである。

※

「危機に対する反応は、すぐさま新しい科学の創造としてあらわれる」(二九六頁)、この創造活動が、批判的科学Vだ、とラベッツは次のようにいう。

「孤立した個々の人たちが余暇を犠牲にし、通常の研究を中断してまで、現実の問題に批判的に取り組んでいるのではない。いまや新しい種類の科学、すなわち批判的科学を行なう学派が出現しているのである。

この学派では、プラクティカルな研究プロジェクトの一環として質の高い共同研究がなされ、暴走するテクノロジーが人類や自然にもたらすさまざまな危害を、発見し、分析し、批判を行なっている。またそれらのテクノロジーマタラシの危険を公表し、廃止を求めるキャンペーンを行なうことによつて運動が支えられている。」(二九六―七頁)

さらに続けてラベッツは、それがになう問題状況を次のように述べる。

「批判的科学が取り扱う問題状況は、誰かが故意に環境を汚染しようとした結果ではない。それは、もとどおりに戻そうとしても厄介で金の

かかる行為の慣行から生じたものである。そしてそれは勢力の大きい企業グループや国家自体の利害が絡み合つて発した問題なのである。問題の実態調査をするだけで、内情暴露とキャンペーンが伴わなければ、そのような仕事はほとんど無意味なものである。だから、批判的科学が政治的になることは不可避であり、また絶対に必要なことなのである。」(二九七頁)

批判的科学が、「テクノロジーのつくり出した問題はテクノロジーが解決する」という、科学にたいする過信・誤信に対して、その虚妄を突く形で登場した背景には、科学がテクノロジーと結んだ、ラベッツのいう産業化科学として巨大化し、それらが社会規範をつくりだし、人間や社会を制御する状況があつた。科学≡技術の可能性が人間の進歩の可能性と等置され、その範囲内に人間は沈潜した。つまり、人間の営為は科学≡技術の営為によつて規定され、その限りで人間は確実に科学に従属した。G・オーウエルの逆ユートピアはすでにその本質を現在に表出していたのである。したがつて、その世界を脱出するにはまず科学≡技術は決して自律性をもたず、自己修正力をもたない、という前提に立たねばならなかつた。そして、その認識こそ、ラベッツが社会と科学の関係Vにおいてとらえたものだったのである。

※ ※

現代の特徴は、「科学は生産の基本的要因であり、それを進めるためには高度に訓練された『科学的人的資源』をほとんど供給しなければならぬ」(三四頁)とする、テクノクラシー的科學観Vが広

範に採用されるようになった点にある、とラベッツはいう。それは『科学』を、単に財政的援助を与え計画的に管理するだけで我々すべてに限りない祝福をもたらしてくれる、独立した、自己充足的な生産の要因であると見なす。」(三四頁)

この事態は科学の産業化、つまり産業化科学の成立を意味している。この状況成立は、一方において、科学を真理探究という自己充足的な体系とおき、他方では、社会ないし社会状況において、その兩者をつなぐのにA応用V科学を設定する関係、つげによつてゐる。この論理構造は、真理探究としての科学と応用科学の分業体制を確立する。そして、この構造からして、科学者は応用部門の悪しき結果から免責される論理が成立するのだ。しかし、「科学の二つの部門の間に『真理』に仕えるものと、『帝王』^{カイザル}に仕えるものを分かつ、はつきりした境界線を引くことはできない。どんな科学知識も、『純粹』を保証されたり、応用を免れるようなことがないのは、全く自明」(三六頁)であり、だからこそ「科学のどの部門も、産業化からくる問題に免疫ではない」ことになるのである。

このように問題状況を現代科学に見すえれば、科学を知識体系とすることへの反論が生ずるのは当然である。つまり、今日の科学は、社会に適用されるものではなく、科学そのものがすでに社会のなかに本質的に組みこまれているのであつて、だからこそ科学はそれ自体社会的営為なのだ、とする新しい視角が提出されてくるのである。したがつて、アカデミックな科学と産業化科学という二元論は、科学者が歴史としての現代への倒錯した認識論に立つ限りで持

続しているが、それは社会行動としての科学、あるいは社会行動論の対象としてのA科学とは何かVに改めて答えることによつて、みずから啓蒙するための基本的問題なのだ、というべきである。言いかえれば、「科学研究が大いに創造的であつて全く堅実だという二つの特徴を兼ね備えている唯一のものであると信ずることができるのは、知識の発達が無条件に前進的かつ累積的に行なわれるという十九世紀的信念を共有する者だけである。」(八六頁)

思えば、政治における科学は、この十九世紀的信念によつて支えられてきたほど、素朴な志向をもつていた。そこでの知識の発達は、デモクラシーの世界大の拡充という歴史性によつて承認された。しかし、政治の反科学はこのノッペラボーの世界観、進歩の歴史観に対する反定立なのである。それは「科学的知識はたしかに、それを確立していくときの環境から独立したものになつてゐるが、にもかかわらず、その知識を發展させた文化的環境に負つてゐる。ある知識が他の文化圏にも真正の知識として受け入れられるためには、その対象や前提となる妥当性と価値の基準が、その受け入れ文化の世界観と密着したものであらねばならない」(二三五頁)ことを思い当てねばなるまい。

その上で、それを生みだした文化に負うところの少ないA道具立てVを手段として、外的世界についての知識を獲得することへの志向を確定することが要求されるのである。それでもなお、われわれには「現時点において無能の、あるいは少なくとも未成熟の最も明白な形跡を呈している専門分科は、人間の行動を、数学的・実験的自

然科学のスタイルに従つて研究しようと試みている専門諸分科である(二三三頁)という指摘をそのまま受け入れねばならぬ状況がある。

ラベッツはこの未成熟(ないし無能)の分野が果たす機能を、「ある集団に受け入れられている知識体系であり、その機能が知識のさらなる前進の基礎を提供することにでなく、それを信ずる集団に慰さめと安心をもたらすことにあるような知識体系」(二三三頁)として、俗信的科学の呼称を与える。

無能にもかかわらず、確立できる知識、という命題は、政治科学には痛烈な衝撃ならざるをえない。しかも問題なのは、俗信的科学のアカデミズム科学に対する挑戦の時期は、政治学ではとうに終つていて、今では俗信的科学がアカデミズム科学の一部を占取し、「科学の『俗信的』側面がその『学問的』側面に反作用し」、そして「『俗信的』側面での科学研究の産物と『学問的』側面での産物が、表面的には非常に異なつたスタイルと内容を有するにしても、それらはあらず、単一の事業の内部で異なつた機能を演じているにすぎない」(二六三頁)という、一種の混合状況の承認が政治学内部に生じているように思える。

※ ※ ※

ラベッツは徹頭徹尾、社会活動としての科学活動の視角から科学を論ずる。その意味での科学の衰退は人間の怠惰を明らかにする。しかも、この衰退を防ぐには、科学者が「高度に倫理的な行動と知

恵とをもつて、研究の質の管理と方向づけに取り組まねばならない。」だが、それには科学内部で存続してきた \wedge 進歩の理念 \vee が終焉すること、つまりこの長かりし科学の黄金時代の終焉を宣言することではじめねばなるまい。さらに「科学者が倫理的であろうとすることは、今日もイデオロギーとして受け継がれ、科学者共同体では意味を持ちつづけているが、科学が産業化するにしたがつて十分なものとなつてしまつた。つまり伝統的な『科学者の倫理』は産業化科学の出現によつて生み出された多くの問題には無力なものとなり、科学者は絶えず産業化科学の誘惑にさらされている」(二七五—六頁)状況を峻別する知覚力が要求されよう。

だからといつて、注意しなければならないのは、社会制度として体制化された産業化科学の癒し、難い問題をひとたび暴露してしまえば、制度はほどなく解体してしまふのだと信じ込む、 \wedge 急進的改革者の素朴な合理主義 \vee 観をとつてはならない点である。そのためには科学の神話としての中立科学観を、科学者自身が放逐しておかねばならない。つまり、「アカデミズム科学のもつ道徳的中立性が実在するとしても、それは拡張して考えれば、アカデミズム科学にとつて独自の道徳的問題が生まれてくる」(二八七頁)以上、科学は中立性をもつて道徳から免罪だとするわけにはゆかないのである。

この難点を突破できなければ、「まだアカデミックで自由で自律的であると半ば信じながらも、一方では産業化されてしまい、国家や産業に対して依存し責任を負つていることを知つている」(二九四頁)という二重人格者としての科学者が実現することになる。ある

いは、「一般公衆は知識の向上と普及について科学に強い期待をかけてきたが、それに対して科学は、アカデミズム学問の一部として、知識の向上と普及には責任をもてない」と長らく主張し……科学の自律性と倫理的完全性を楯に、アカデミズム科学のメンバーの特権と責任の免除を要求」(二一九―二二頁)する限り、科学の産業化によつて生じた新しい問題に背をむけ、その解決に目をとることにならぬ。つまり、これが科学の腐敗なのである。

※ ※ ※

科学が腐敗することは、人間の墮落にも通じている。それは、急激に変化する環境から発する諸問題を人間が解決しなければならぬ、そのための手段と方法を人間がしかと握つていられない状況を意味しているからである。ラベッツがいう批判的科学は、まさにこうした質の科学をいわんとするものである。たとえば、「批判的科学では、人間と自然の調和を保つために人工的なシステムと自然のシステムが張りめぐらす複雑な因果関係の網目構造を十分に理解しなければならぬ」(三〇二頁)と指摘されるように、人間と自然との調和した世界像がそこに展開されるものなのである。だからこそ、「批判的科学の研究では、次々と問題を設定していかなければならぬし、それらの問題設定は新しい挑戦と困難をはらんでい」(三〇二頁)、その連続的状况に耐えることが要求されるにちがいない。

もちろん、批判的科学も未成熟な段階にある限り、陥りやすい陥

穽がある。ラベッツはそれを、未成熟な科学を現実的な問題に応用する際に陥りやすい陥穽と、ラディカルな政治改革運動が陥りやすい陥穽として警告を忘れない。しかし、この陥穽は、科学者の外界に対する関係、つまり人間と自然との新しい関係を模索することに問題状況をすえつけ続ける限りで、何とか回避しうるものであらう。

むしろ、「批判的科学が規模と影響力とを伸長したとき、社会が特に暴走するテクノロジの問題を巧妙に取り扱えるようになり、批判する側とされる側との間に一種の和解が生ずるのが避け難くなる」(三〇〇頁)点での腐敗への陥穽の方が重大である。現に、アメリカの人類科学にはすでにその状況はおきているのである。

このような危険性は、社会活動としての批判的科学活動が、やはり科学Vを正当に自称する限り、現在の科学が国家科学であり巨大科学であり、そのうえで伝統的な科学性の持続が維持されているとする科学者の錯誤を誘発しやすい。とすれば、ラベッツが最後に「ロマンティックで人間愛に満ちたラディカルな哲人の子言者の夢想は、事実をいくら積み上げて、また闘士の群れを集めても現実化する可能性はない。しかし彼らの夢は、断続的に変則的に起る危機の際それに対する反応を通じて存在を主張しつづける。そして時にはある人の心の中に創造的な緊張感を呼び起こすのに成功する。彼は、予言者の夢と、僧侶に支配された現実とを総合しようと勇氣を持つて立ちむかう。しかし、彼も失敗し、未解決の問題が残るであらう。しかし彼の言葉は、おそらくある学問や人生において、また一般的な人生智として生き延びて後世の人びとに問いかけるであ

るう」(三〇八頁)と語つた言葉の意味は、批判的科学的命運を予言しているかもしれない。

だが、それにもかかわらず、次の村上陽一郎氏の本書に対する評言が重大なほど、われわれはいま科学の落ちこんだ深い谷間で沈溺しているのである。

「科学者自身が、ときに片手間に科学の『行き過ぎ』を批判するのはなく、科学者が自らの科学的活動の一環として行ふこの『批判的科学』は、科学者の良心というような個人的レヴェルでの問題意識から大きく足を踏み出した営みとして考えられており、単に科学の感情的否定でも、樂觀的礼讃でもない、冷静な啓蒙と、ねばり強い調査と、鋭い告発と、的確な戦略とを用いた科学自身の自己運動として注目される。」(村上陽一郎「科学を動的に把えるために」・『翻訳の世界』一九七七年十一月、一〇一頁)

※※※※※

われわれの政治学には、みずから展開した科学方法論が欠けていると思われる。とくに戦後政治学はそうだといえる。それは、ひつきようは、社会科学の変化による科学像の変貌に乗つた限りのものではなかつたか。行動科学革命にしても、行動科学以後を画期した契機にしても、ありようは八高まりゆく期待の革命Vと八高まりゆく挫折の革命Vの波に身を委ねた結果だと言つたら過言であらうか。

その意味では私は、政治学はついに政治科学ではなく、そこでありうべき八科学Vは独自に展開すべき科学方法論を要すると考え

てきた。それは「おまえのやつていることは、いつたい何のためなのか」という自問であり、その問いかけから始めねばならぬ性質のものであらう。それをラディカル政治学という必要はない。なぜならば、政治学は本質的に批判学のモメントを内在化しているからである。とすれば、ラベッツの本書は、政治学に引きつけて読まれることが本来的に可能である。

その意味で、政治学の政治科学からの脱出の手がかりは、本書にもられた内容に多く認められるはずである。人間のための科学を想定している諸君に、一読をすすめたい労作である。欲をいえば、大部であるがゆえに原著の約四割が削除されている(原著者の合意の上で)部分が、近い将来に完全な形で、われわれ読者に提供されることを望みたい。(A5版、XXvi+三一八頁。秀潤社刊、一九七七年、二、五〇〇円)

内山 秀夫